



**Provenancing Metals Using Lead Isotopes:
Its Applications to the Mediterranean Area and Japan**

中井俊一

- ① 鉛同位体比による産地決定の原理
- ② 鉛同位体比を用いた産地決定の適用例
- ③ 鉛同位体比を用いた産地決定への異論
- ④ 日本での鉱床鉛同位体比データベースの現状

まとめ

【論文要旨】

1960年代に Brill がその可能性を示して以来、鉛同位体比による鉛、銀、銅製品の考古遺物の産地推定が行われてきた。最近、この方法によっては産地推定は不可能だという説をとるグループがある [Budd 1995]。小論ではこれまでの研究報告をふまえ、主に英国で行われてきた議論を検討する。地中海周辺地域の銅、鉛鉱山の鉛同位体比は集中的に測定が行われており、豊富なデータが蓄積されている。このデータベースにより、金属器考古遺物の産地推定は正確さを増したと考えられる。

Gale ら [1997] は、青銅期時代に地中海周辺の広い地域に分布していた銅牛革型インゴットについては、鉛同位体比が非常に均質であること、同位体比がキプロス島の特定地域の鉱山と一致することをもとに、この地域から原料を得たと結論している。

日本の鉱山についてのこれまでのデータを検討すると、日本全体で比較的均質な鉛同位体比を持つことがわかる。日本では個々の鉱山の同位体比による分離のためには、考古学的に問題となる鉱山のしぼり込み、それらからの鉱石の鉛同位体比の測定を集中して行い、データベースを蓄積することが必要である。日本と大陸との分離は一部で重複する試料もあるが全般的に言って分離が可能である。この場合も歴史的に意味を持つ鉱山を限定することにより議論はより明確になると考えられる。